

マルコム Xによるマッカからの手

5.0

明:

マルコムXはある深 によって人 差、そしてネ ション オブ イスラム教 への を一 させ、真のイムへと改宗しました。それはハッジによるものでした。

目:[「事 崇 行 とその 実践の五ヶ条」とその他の崇 行](#)

より: IslamReligion.com

📅 1 Jun 2010

集日 21 Jun 2010

ハッジを行なうという祝福を受けた多くのムスリムたちは、いかにそれが人生 を えて
しまう旅であったかを ります。これは一部の人々にとっては一 著です。

マルコム X、名アル=ハッジ マ リク アル=シャバ ズはハッジを通し、1964年4月に真の
イスラ ムの光を目の当たりにした一人でした。彼はそれ以前には 人至上主 であるネ シ
ョン オブ イスラム教 のメンバ、そしてスポ クスマンとして、白人は 魔であり、 人が 越
した存在であることを信じていたのです。

彼は1964年3月にネ ション オブ イスラム教 を にしたことをきっかけにハッジを行ない、
白人と人 についての考え方を完全に えたのでした。

以下はアル=ハッジ マ リク アル=シャバ ズによる、ハ レムの 烈な追 者たちに向けた、
自身の を物 る心のこもった手 の です。そこには何が彼の人 における 点を 的に えたのか
、また彼の祝福された旅がいかなるものであったかが明 されています。私たちはこの
手 が かれた当 は、アフリカ系アメリカ人に する数世 に渡る抑 が初めて公に られ、非 さ
れるようになった 史的 点であったことを念 に入れておくべきでしょ📄。

“私は、アブラハム、ムハンマド、そして 典に登 する全ての 言者たちの家である
この古代の 地において、あらゆる肌の色の人々によって 踐されているような 切な
もてなしと 倒的同胞 の精神を、これまで一度も目の当たりにしたことがなかった
。この一 、私がまわりで て来たあらゆる人 の人々による しさにはすっかり言 を失
ってしまい、魅了されてしまった。

“私は なる都市マッカへの という祝福を受け、ムハンマドという名の若きムタッ
ワフに先 されてカアバ外 を七周し、ザムザムの井 からの水を んだ。私はサファ 山
とマルワ 山の を七回行き来した。私は古代都市ミナ 、そしてアラファ山で礼 した
。

“
そこには何十万人もの巡礼者たちが世界中から集 していた。彼らは青い目をした
金 から い肌のアフリカ人まで、あらゆる人 から 成されていたが、我々は皆同じ 礼
を行ない、私のアメリカでの 上、白人と非白人の では して起こり得ないと信じて
いた 一と同胞 の精神を体 していたのだ。

“
アメリカはイスラ ムを理解する必要がある。なぜならこれは社会から人 差 をなく
す唯一の宗教であるからだ。私はムスリム世界を旅して回るにあたり、アメリカ
では白人と なされるような人々と出会い、 し、更には食事まで共にした。彼らの
心からはイスラ ムの教えによって‘白人’の 度が取り除かれていたのだ。私はこ
れまでに一度も、このような さと真の同胞 が、肌の色に なく、全ての人 によって
踐されているのを たことがなかった。

“あなたは私の口からこういった言 が出て来ることに くかもしれない。しかしこ
の巡礼によって私が て来たこと、そして して来たことは、これまでの私の思考パ
タ ンを大きく え、以前の持 の一部を破 させるものだった。それは私にとって して

しいことではなかった。私は常に自分自身の 信に囚われず、
事 のみを捉え、新しい や知 を得ると共に、人生において を つめることに努めてきた。私は知的な真 の探求と同 に求められる柔 さ、そしてそのために必要とされる、心の常なる 放を心がけて来た。

“ムスリム世界でのこの11日 、私はムスリム同胞たちと共に同じ神に祈りつつ、同じ皿から食べ、同じ器から み、同じ寝床で寝た。彼らの目の色は真っ青であり、 の色はこれ以上ないほどの金色であり、肌の色は真っ白であった。そして彼ら “白人” ムスリムたちの言 、ふるまい、行 からは、ナイジェリアやス ダン、ガ ナのアフリカ 人ムスリムたちと同じ真 さが感じられたのだ。

“我々は本当に同一（の兄弟）なのだー
なぜなら彼らの唯一神への信仰は、彼らの心から、行 から、そして 度から “白さ” を取り除いたのである。

“私はこの によって、もしもアメリカ白人が神の唯一性を めたのであれば、人 の唯一性も めることが出来るのではないかと考えた。そして彼らの人 の “相 ” による他者の 、妨げ、危害もなくなるのではないかと。

“人 差 はまるで末期癌の症状のようにアメリカを んでいる。いわゆる白人 “キリスト教徒” アメリカ人の心はそういった破 的に して有 であると 明された解 策を受け入れるべきである。もしかしたら、それは差し迫った惨事から ー でアメリカを救うかもしれない。人 差 による惨事はドイツにおいて、ドイツ人自身を破 しているのではないかと。

“

地での一 ー は、アメリカで 人と白人との に起こっていることに し、更なる精神的洞察力を うことを可能にさせた。アメリカ 人は、彼らの人 的憎 に して められるべ

きではない。彼らはただ400年にも渡るアメリカ白人からの 拗な人 差 に反 しているだけなのだ。しかし、人 差 がアメリカを自 的な 路へと突き かしている状 の中、大学や などで学ぶ白人の若い世代たちは、あちこちの壁に描かれた手 きのメッセジを て、真 への精神的探求を始めるであろうことを、私は彼らと わった から信じている。それは人 差 が必然的にもたらす悲惨な 末を避けるための、アメリカに残された唯一の道なのである。

“私はこれ程までの 誉を授かったことはこれまでになかった。これ以上の を感じさせられたこともこれまでになかったのである。アメリカ 人に多大な祝福が与えられたということなど一体 が信じるだろうか？ 数日前の夜には、アメリカでは白人と呼ばれるような、国 外交官であり、大使であり、国王の 近でもある人物からホテルのスイ トル ムと彼のベッドを提供された。私はそのような 誉を受けるであろうことなど、全く にも思わなかった。アメリカでそのような 誉を受けるのは一 国の王に してであり、 人に してではないのだ。

“全世界の主である神にこそ全ての称 あれ。”

マルコム Xは多くの りある をしました。 切さと 大きさは、彼が多くの 所で受けたもてなしによって感 を受けた特 でした。彼は なる人 同士の兄弟 を目の当たりにし、次のような言 で人 差 を放 したのです：

“私は人 差 主 者などではない 去には全ての白人たち、つまり人 全体を一刀 断してきたが、この一般化によっておそらくそれに しない一部の白人たちも つけてしまったかも知れない。 都マッカにおける先の巡礼の 果、私は精神的な を受ける祝福があった。私はもうある特定の人 に し非 したりはしない。私は今、本物のスンニムスリムの人生を生きようと励んでいる。 り返すが、私は人 差 主 者でもなければ、人 差 の信条に同 したりもしない。私は全ての人々が自由、正 、平等、生命、解放を得、幸せの追求が出来るようになることを心の底から望んでいる。”

Footnotes:

[1]

『ルツ』の著者、アレックス ヘイリ による口述 『マルコムX自』より。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/471>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。